

社会的活動に対するコロナ禍の影響

—危機下における地縁的な活動やボランティア活動—

塚崎 裕子

大正大学 地域構想研究所 教授

(要旨) 本稿では、地縁的な活動やボランティア等、社会的活動への参加者を対象としたアンケート調査の結果に基づき、社会的活動に対するコロナ禍の影響をみた。コロナ禍の影響を大きく受け、行われなくなった活動も多かった一方で、様々な措置を複数講じて、何とか継続している活動も少なくないことが分かった。地縁的な活動の方がボランティア等より活動再開の見込みが立っていない割合は多かった。地縁的な活動では、地域を問わず、活動参加者の活動への思いや地域課題を解決したいという問題意識が活動再開の原動力となっていることも明らかになった。危機下での社会的活動の状況、社会的活動の継続力や活動の回復力の拠って立つところを把握することは、コロナ禍のような危機に再び立ち向かわなければならなくなった際の備えとなり、ひいては社会の分断や人々の孤立を防ぐことに役立つと考える。

キーワード： 社会的活動、地縁的な活動、ボランティア、ソーシャル・キャピタル、コロナ禍

1. はじめに

コロナ禍は、私たちの様々な活動に甚大な影響を与えた。自治会やボランティア等の地域社会を支える社会的活動¹の多くもその影響を免れず、停滞を余儀なくされた。社会的活動の停滞は、人のつながりを分断し、コミュニティの機能不全や地域に住む人々の社会的孤立を招いた。コロナ禍によって、社会的活動が果たしている役割の重要性が改めて認識された。

本稿では、社会的な活動に携わっている人を対象としたアンケート調査の結果に基づき、コロナ禍によって社会的活動が受けた影響、コロナ禍の影響を受けても活動を継続できたケースやいったん活動を停止しても再開できる見込みが立ったケースの背景等について分析する。加えて、生活の

満足度や居住希望と社会的な活動との間にはどのような関係があるのかについて考察を行う。

危機に直面した際の社会的活動の状況、危機下における社会的活動の継続力や活動の回復力の拠って立つところを把握することは、コロナ禍のような危機に再び立ち向かわなければならなくなった際の備えとなり、ひいては社会の分断や人々の孤立を防ぐことにつながると考える。

本稿の構成は次のとおりである。2ではこれまでの調査研究について概観する。3では分析の基礎とした調査について説明する。4では社会的活動に参加したきっかけ、5ではコロナ禍の下における活動の状況、6では生活満足度や居住希望と社会的活動との関係について述べる。7では全体のまとめ・考察と今後の課題について言及する。

¹ ここでの社会的活動の定義は「グループや団体、複数の人で行っている社会や家族を支える活動のこと。活動内容が社

会や家族を支える活動であっても、単なるご近所づきあいによるものは含まない。」とする。

2. 先行研究

社会的活動については、ソーシャル・キャピタルの構成要素の一つであるという観点からの研究が多く行われている。即ち、Putnam(1993)のソーシャル・キャピタルの定義である「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる、信頼・規範・ネットワークなどの社会的しくみの特徴」のうち、規範に関わる要素として社会的活動を位置付け、調査分析を行っている研究がある(内閣府国民生活局(2003)、内閣府経済社会総合研究所(2005)、日本総合研究所(2008)、地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会(2016)等)。これらの研究において、社会的活動への参加とソーシャル・キャピタルとの間に、互いに互いを高めていくようなポジティブ・フィードバックの関係があると指摘されている。

日本総合研究所(2008)、地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会(2016)は、ソーシャル・キャピタルを Putnam(1993)が提唱した結合型と橋渡し型に分け²、地縁的な活動への参加は結合型の一要素、ボランティア等への参加は橋渡し型の一要素として分析を行っている。分析の結果、地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会(2016)は、女性・高齢者が相対的に高いソーシャル・キャピタルを有することを見出している。また、日本総合研究所(2008)は、地縁的な活動への参加とボランティア・NPO・市民活動への参加は関係があり、結合型と橋渡し型が、互いに相反するものではない可能性が高いことや、地縁的な活動への参加と完全失業率との間に負の相関、ボランティア等への参加と仕事時間との間に負の相関が認められることを指摘する。

地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会(2016)は、ソーシャル・キャピタルと生活の満足度について、概ねソーシャル・キャピタルが高い人ほど満足度も高い傾向にあると指摘する。また、松島・伊角(2019)は、ボランティア経験がある人

ほど、幸福度が高いという関係性が認められると指摘する。

コロナ禍の下における社会的活動について、総務省地域力創造グループ地域振興室(2021)によると、地域運営組織が実施している活動のうち、コロナ禍の影響により実施できていない活動として、「地域イベント運営」(53.7%)、「防災訓練・研修」(23.4%)、「高齢者交流」(22.2%)が挙げられている。吉田(2021)は、北東北3県の市町村社会福祉協議会へのアンケート調査の結果を踏まえ、「新しい生活様式」に配慮した「共助」の仕組みの再構築が地域福祉活動に求められると示唆している。学術講演会報告(2021)は、豊中市社会福祉協議会の事例として、往復はがきの活用、お困りごとのアンケートの実施、豊中社協 YouTube チャンネル・豊中社協 TV の開局及び動画配信、屋外での子ども食堂の実施等、新しい助け合いや社会参加の形を模索した、様々な取り組みが行われていることを紹介している。新田(2022)は、生活困窮者支援はライフラインと受け止め、一切自粛せず最小限のNPO スタッフのみで使命感を持って活動した仙台夜まわりグループでの経験を踏まえ、非常事態下での社会的インフラの脆弱性を指摘する。畠山・大島(2021)は、地域見守り活動の取り組みを整理することで新しい生活様式の下で展開される地域における包括的支援体制構築の課題を提示している。

このように社会的活動については、ソーシャル・キャピタルとの関係、生活満足度との関係、コロナ禍の下での個別事例の活動実態等について、研究が行われている。しかし、コロナ禍の下での社会的活動の全般的な状況について分析を行った研究は管見の限り見当たらない。

そこで、本稿では、社会的活動への参加者を対象として実施した調査の結果を踏まえて、コロナ禍によって社会的な活動が受けた影響、コロナ禍の影響を受けても活動を継続できた背景、いったん活動を停止しても活動が再開できる見込みが立

² 日本総合研究所(2008)は、結合型は、組織の内部における人と人との同質的な結びつきで、組織内部での信頼や協力、結束力を生むソーシャル・キャピタルであり、橋渡し型は、異

なる組織間における異質な人や組織、価値観を結びつけるネットワークであるソーシャル・キャピタルと定義している。

った背景、生活の満足度や居住希望と社会的な活動との間の関係等について分析・考察を行う。

3. 分析の基礎とした調査の概要

本稿が分析の基礎とした調査は、大正大学地域構想研究所(2022)の「コロナ禍の下における社会的活動の状況についてのアンケート調査」である。本調査は、コロナ禍が社会的活動に及ぼした影響について把握することを目的として、コロナ禍前に地縁的な活動、ボランティア等³のいずれか、或いは両方に参加していた(現在も継続している場合も含む)、全国に住んでいる20代以上を対象に、2021年12月にインターネット調査を行ったものである。864人から有効回答を得た。回答者のうち、地縁的な活動とボランティア等の両方の活動に参加していた人は180人(20.8%)、地縁的な活動のみ参加していた人は475人(55.0%)、ボランティア等のみ参加していた人は209人(24.2%)であった。調査の対象者の条件とはしていないが、上記の2つの活動との比較のため、スポーツ・趣味等⁴についても質問を行っている。全体と活動別に分けて、回答者の年齢、性別、仕事・学業等、居住地が政令指定都市・東京23区であるか否か、居住地の高齢化率を表-1に掲げる。

表-1 基本統計量

	全体(N=864)		地縁的な活動(N=655)		ボランティア等(N=389)		スポーツ・趣味等(N=375)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
年齢(歳)	46.6	15.8	47.8	15.4	42.9	15.8	46.6	15.9	
男性	0.498	0.500	0.518	0.500	0.532	0.499	0.498	0.541	
仕事・学業等	正規雇用	0.414	0.493	0.423	0.494	0.465	0.499	0.477	0.499
	非正規雇用	0.157	0.364	0.156	0.363	0.131	0.338	0.117	0.322
	自営業	0.082	0.275	0.090	0.286	0.082	0.275	0.101	0.302
	その他就業	0.053	0.225	0.047	0.212	0.059	0.236	0.053	0.225
	学生	0.035	0.183	0.021	0.145	0.062	0.241	0.043	0.202
学生ではない	0.258	0.438	0.263	0.440	0.201	0.400	0.208	0.406	
政令都市・23区	0.343	0.475	0.327	0.469	0.378	0.485	0.360	0.480	
高齢化率(%)	27.4	5.1	27.8	5.3	26.9	5.0	27.3	5.0	

(資料出所) 大正大学地域構想研究所「コロナ禍の下における社会的活動の状況についてのアンケート調査」(2022)(以下同じ)

(注)年齢及び高齢化率以外の変数はダミー変数化した。以下の表で同じ。

4. 活動に参加したきっかけ

³ 調査票において、「地縁的な活動」は、「自治会、町内会などの地縁的な活動(自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子供会、消防団など)」、「ボランティア等」は「ボランティア・NPO・市民活動(まちづくり、高齢者・障害者福祉や子育て、スポーツ指導、美化、防犯・防災、環境、国際協力活動など)」と定義している。

地縁的な活動に参加したきっかけとして、最も当てはまるものを1つだけ選択してもらった(表-2)。地縁的な活動では「家族が参加していた、あるいは家族にかかわる活動だから」(32.7%)と「みんなが参加しているから」(17.3%)が1位、2位を占め、ボランティア等及びスポーツ・趣味等では「友人・知人に誘われて」(21.6%、25.9%)と「家族が参加していた、あるいは家族にかかわる活動だから」(21.1%、22.4%)が1位、2位となっている。

スポーツ・趣味等において「地域にある課題の解決に貢献したかったから」活動に参加した人が13.1%いた。スポーツ・趣味を通じて社会的活動を行っている人も少なくないことがわかった。

表-2 活動に参加したきっかけ (%)

	地縁的な活動(655)	ボランティア等(389)	スポーツ・趣味等(375)
家族が参加していた、あるいは家族にかかわる活動だから	32.7	21.1	22.4
子育てが一段落して、あるいは定年で時間ができたから	5.2	9.5	9.9
友人・知人に誘われて	9.2	21.6	25.9
地域にある課題の解決に貢献したかったから	16.3	19.3	13.1
みんなが参加しているから	17.3	4.6	5.6
人手が足りなくて仕方なく	10.2	6.2	4.3
なんとなく	4.1	12.3	13.1
その他	5.0	5.4	5.9

5. コロナ禍の下における活動の状況

(1) 活動へのコロナ禍の影響

コロナ禍によって、参加していた社会的活動は影響を受けたかと尋ねたところ(表-3)、「大きく影響を受け、ほとんど活動が行われなくなった」と回答した割合は、地縁的な活動では57.9%、ボランティア等では48.3%、スポーツ・趣味等では42.9%となった。対面性が重要な要素となっている⁵地縁的な活動が最も深刻な影響を受けたことが明らかになった。

⁴ 調査票において、「スポーツ・趣味等」は「スポーツ・趣味・娯楽活動(各種スポーツ、芸術文化活動、生涯学習など)」と定義している。

⁵ 中田等(2009)は、「人間関係の中でなお極めて重要な、生身の人間が顔突き合わせるフェイス・ツー・フェイスの関係を作り出す場となっている」という地縁組織の性格を指摘する。

表-3 活動へのコロナ禍の影響 (%)

	地縁的な活動 (655)	ボランティア 等(389)	スポーツ・趣味等(375)
大きく影響を受け、ほとんど活動が行われなくなった	57.9	48.3	42.9
影響を受けたが、何とか活動が継続された	33.4	37.0	43.7
ほとんど影響を受けなかった	8.2	13.9	13.1
その他	0.5	0.8	0.3

「影響を受けたが、何とか活動が継続された」と回答した人に、活動を継続する際に講じた措置を複数回答で尋ねたところ(表-4)、地縁的な活動では、「飲食や懇親会だけやめて活動を継続」(46.1%)が最多で、続いて「イベントなどの規模を縮小して活動を継続」(42.9%)が多かった。ボランティア等では、「イベントなどの規模を縮小して活動を継続」(43.8%)が最多で、次いで「十分な感染防止対策を施して活動を継続」(40.3%)が続いた。スポーツ・趣味等では、「十分な感染防止対策を施して活動を継続」(63.4%)が最も多かった。各活動の特性に応じ様々な措置を複数講じて、活動継続に至っていることが分かった。

表-4 活動の継続のために講じた措置(複数回答) (%)

	地縁的な活動 (219)	ボランティア等 (144)	スポーツ・趣味等 (164)
オンラインを活用して活動を継続	17.4	23.6	15.2
飲食や懇親会だけやめて活動を継続	46.1	34.0	26.2
イベントなどの規模を縮小して活動を継続	42.9	43.8	-
中心となっているメンバーのみ活動を継続	25.6	25.0	-
十分な感染防止対策を施して活動を継続	38.4	40.3	63.4
活動の回数を減らし活動を継続	42.5	34.0	47.6
一定期間、活動を休止した上で活動を継続	21.0	29.2	29.9
その他	0.5	0.0	0.6

表-5 影響を受けたが、何とか活動が継続 (二項ロジスティック回帰分析)

	地縁的な活動		ボランティア等		スポーツ・趣味等		
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	
定数	-0.932	0.394	-0.216	0.805	2.601	13.475 *	
男性	-0.595	0.551	-0.152	0.859	-0.668	0.5128 **	
年齢	0.012	1.012	0.008	1.008	-0.007	0.9931	
活動数(仕事・学業含)	0.1125	1.119	-0.263	0.769 *	-0.496	0.6088 *	
活動に参加したきっかけ	地域課題解決貢献	0.1958	1.216	0.233	1.262	0.484	1.6219
	友人・知人に誘われて	0.3638	1.439	-0.543	0.581 +	0.344	1.4102
地域外でも活動	-	-	0.143	1.154	-	-	
政令指定都市・23区	0.15	1.162	0.296	1.345	-0.073	0.93	
高齢化率	1.087	2.965	1.908	6.743	0.511	1.667	
Nagelkerke		0.123		0.048		0.059	
-2 対数尤度		437.028		442.425		435.844	
χ2		24.257		16.021 **		15.998 **	
N		598		332		325	

(注) +: P<0.1, *: P<0.05, **: P<0.01。以下の表で同じ。

「影響を受けたが、何とか活動が継続された」と「大きく影響を受け、ほとんど活動が行われなくなった」と対応が分かれた要因を探るため、「ほとんど影響を受けなかった」と「その他」を除き、「影響を受けたが、何とか活動が継続された」を被説明変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。説明変数は、性別、年齢、活動数、活動に参加したきっかけのうち「地域にある課題の解決に貢献したかったから」や「友人・知人に誘われて」を選んだか否かを用いた。ここでの活動数は、地縁的な活動、ボランティア等、スポーツ・趣味等、仕事・学業のうち、従事している或いは従事していた活動の数とした。ボランティア等についてのみ、地域外での活動について尋ねており、地域外でも活動しているか否かを説明変数に加えた。また、社会的活動の状況が地域の特性により異なるという実態⁶を踏まえ、回答者の居住地が都市部か否か、高齢化が進んだ地域か否かといった地域特性が関係しているかをみるため、政令指定都市・東京 23 区、高齢化率を説明変数に加えた。(表-5)

分析の結果、地縁的な活動では、女性ほど、また、高齢であるほど、活動が継続された傾向があった。ボランティア等では、活動数が少ない人ほど、友人・知人に誘われたことが活動参加のきっかけでない人ほど、継続された傾向が認められた。スポーツ・趣味等では、女性ほど、活動数が少ない人ほど、活動が継続された傾向があった。

⁶例えば、地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会(2016)は、社会参加指数(地縁的な活動とボランティア等の参加率を足して2で割った数値)は、都市に比べ農村地域ほど

高く、人口増加率が高い地域ほど低く、人口減少率が高い地域ほど高い傾向を認めている。

参加していた社会的活動が「大きく影響を受け、ほとんど活動は行われなくなった」と回答した人に、ほとんど活動が行われなくなったことが生活の満足度に与えた影響について尋ねたところ(表-6)、「生活の満足度を下げた」割合は、地縁的な活動は29.6%、ボランティア等は47.3%、スポーツ・趣味等は60.9%であった。地縁的な活動においては、「生活の満足度を上げた」割合が7.4%あった。地縁的な活動への参加者の一部にとって、活動が負担感の大きなものになっている可能性がある。

表-6 生活の満足度に与えた影響 (%)

	地縁的な活動 (379)	ボランティア 等(188)	スポーツ・趣 味等(161)
生活の満足度を下げた	29.6	47.3	60.9
生活の満足度に影響を与えな かった	63.1	49.5	37.9
生活の満足度を上げた	7.4	3.2	1.2

生活の満足度を上げたという回答が一定程度あった地縁的な活動についてのみ、生活の満足度に与えた影響が分かれた要因を探るため、「生活の満足度に影響を与えなかった」を参照グループに多項ロジスティック回帰分析を行った。説明変数は表-5と同じにした(表-7)。

分析の結果、若い人ほど、また、地域課題解決に貢献したかったので活動に参加した人ほど、地縁的な活動がほとんど行われなくなったことで生活の満足度を下げた傾向が認められた。

表-7 地縁的な活動が行われなくなったことでの生活満足度への影響(多項ロジスティック回帰分析:参照グループは「生活の満足度に影響を与えなかった」)

	満足度を下げた		満足度を上げた		
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	
定数	0.164	1.178	-2.955	0.052	
男性	-0.382	0.683	0.421	1.523	
年齢	-0.027	0.974 **	-0.016	0.984	
活動数(仕事・学業含)	0.180	1.198	-0.095	0.9096	
活動に参加したきっかけ	地域課題解決 貢献	1.059	2.882 **	-0.350	0.704
	友人・知人に 誘われて	0.070	1.073	-0.073	0.930
政令指定都市・23区	0.167	1.181	-0.641	0.527	
高齢化率	0.715	2.044	4.514	91.326	
Nagelkerke	0.124				
-2 対数尤度	591.48				
χ^2	39.864				
N	375				

(2) 今後の活動の見込み

参加していた社会的活動が「大きく影響を受け、ほとんど活動は行われなくなった」と回答した人に、今後の活動の見込みを尋ねたところ(表-8)、「活動再開の予定は立っていない」割合は、地縁的な活動は31.9%、ボランティア等は20.7%、スポーツ・趣味等は20.5%であった。「元の活動に戻る予定」、「活動の方式を変えて活動する予定」及び「元の活動の一部のみ行う予定」を足し合わせた、「今後活動を再開する見込み」である割合は、地縁的な活動は67.0%、ボランティア等は71.8%、スポーツ・趣味等は74.0%であった。活動再開の予定が立たない割合においても地縁的な活動が最も深刻であることがわかった。

「活動再開の予定は立っていない」割合は、地縁的な活動は31.9%、ボランティア等は20.7%、スポーツ・趣味等は20.5%であった。「元の活動に戻る予定」、「活動の方式を変えて活動する予定」及び「元の活動の一部のみ行う予定」を足し合わせた、「今後活動を再開する見込み」である割合は、地縁的な活動は67.0%、ボランティア等は71.8%、スポーツ・趣味等は74.0%であった。活動再開の予定が立たない割合においても地縁的な活動が最も深刻であることがわかった。

表-8 今後の活動の見込み (%)

	地縁的な 活動(379)	ボランティア 等(188)	スポーツ・趣 味等(161)
元の活動に戻る予定	22.4	25.0	34.8
活動の方式を変えて活動する予定	21.4	26.6	25.5
元の活動の一部のみ行う予定	23.2	20.2	13.7
活動再開の予定は立っていない	31.9	20.7	20.5
活動をやめた	—	6.9	5.6
その他	1.1	0.5	0.0

「今後活動を再開する見込み」と「活動再開の予定は立っていない」に分かれた要因を分析するため、「活動をやめた」、「その他」を除き、「今後活動を再開する見込み」を被説明変数として、二項ロジスティック回帰分析を行った。説明変数は、表-5で用いた説明変数に加え、ほとんど活動が行われなくなった際、生活の満足度が下がったか否かを加えた。(表-9)

分析の結果、地縁的な活動とボランティア等では、若い人ほど活動が再開する見込みである傾向があった。地縁的な活動では、活動が行われなくなったので生活の満足度が下がった人ほど、地域課題の解決に貢献したいと思って活動に参加した人ほど、活動を再開する見込みである傾向も認められた。政令指定都市・東京23区、高齢化率といった地域の特性は、活動再開の見込みに影響を与えていないことに鑑みると、地縁的な活動では、地域を問わず、活動に携わっている人の活動への思いや地域課題を解決したいという問題意識が活動再開の原動力となっていることが明らかになった。スポーツ・趣味等では、活動が行われなくなったので生活の満足度が下がった人ほど、多くの活動に関わっている人ほど、活動が再開する見込みである傾向が認められた。

表-9 今後活動再開する見込み (二項ロジスティック回帰分析)

	地縁的な活動		ボランティア等		スポーツ・趣味等	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
定数	3.0286	20.668 **	2.536	12.627	0.054	1.056
男性	-0.459	0.632	-0.405	0.667	0.091	1.095
年齢	-0.027	0.973 **	-0.021	0.979 +	-0.023	0.977
活動数(仕事・学業含)	-0.002	0.998	0.327	1.387	0.693	1.999 +
ほとんど活動が行われなくなったので生活の満足度が下がった	0.55	1.734 *	0.443	1.557	1.210	3.353 **
活動に参加したきっかけ						
地域課題解決貢献	0.8655	2.376 *	0.189	1.208	—	—
友人・知人に誘われて	0.3155	1.371	-0.042	0.959	0.462	1.588
地域外でも活動	—	—	-0.429	0.651	—	—
政令指定都市・23区	0.066	1.068	-0.21	0.811	-0.308	0.735
高齢化率	-2.018	0.133	-2.865	0.057	-2.117	0.120
Nagelkerke		0.115		0.108		0.179
-2 対数尤度		439.582		172.430		140.245
χ^2		40.364 **		17.626 **		23.854 **
N		375		174		152

(注) スポーツ・趣味等では「地域課題解決貢献」がモデルに適合しなかったため説明変数から除いた。

6. 生活の満足度・居住希望と社会的活動

(1) 生活の満足度と社会的活動

回答者全員に対し、現在のご自身の生活に満足しているかと質問したところ、回答の分布は、「満足している」が最も多く(48.0%)、「やや不満足である」(23.5%)、「非常に満足している」(10.4%)、「不満足である」(10.4%)、「どちらともいえない」(7.6%)が続いた。

生活の満足度の高低の要因を分析するため、「非常に満足している」を5、「満足している」を4、「どちらともいえない」を3、「やや不満足である」を2、「不満足である」を1として、順序ロジスティック回帰分析を行った。説明変数は、これまでと同様の性別、年齢、政令指定都市・東京23区、高齢化率に加え、活動参加の有無、活動に参加したきっかけのうちいずれかの活動で「地域にある課題の解決に貢献したかったから」、「友人・知人に誘われて」を選んだか否かとした。活動参加の有無に係る説明変数については、「地縁的な活動及びボランティア等の両方の活動」、「地縁的活動のみ」、「ボランティア等のみ」の3グループに分け、「ボランティア等のみ」を参照グループとした。これらとは別に「スポーツ・趣味等」も説明変数に含めた(表10)。

分析の結果、地縁的な活動及びボランティア等の両方に携わっている人ほど、生活の満足度が高い傾向があった。両方の活動に携わっている人はソーシャル・キャピタルの豊かな人と考えられるので、地域活動のメカニズムと活性化に関する研

究会(2016)と整合的な結果といえる。若い人ほど、友人・知人に誘われて活動に参加した人ほど、生活の満足度が高い傾向も認められた。

表-10 現在の生活に満足しているか (順序ロジスティック回帰分析)

		B	Exp(B)
定数	生活満足度=1(不満足である)	-3.968	0.019 **
	生活満足度=2(やや不満足である)	-2.466	0.085 **
	生活満足度=3(どちらともいえない)	-2.134	0.118 **
	生活満足度=4(満足している)	0.418	1.520
男性		-0.053	0.949
年齢		-0.007	0.993 +
地縁的な活動及びボランティア等の両方の活動		0.505	1.657 **
地縁的な活動のみ		0.137	1.147
スポーツ・趣味等		0.162	1.176
活動に参加したきっかけ	地域課題解決貢献	0.185	1.203
	友人・知人に誘われて	0.295	1.344 +
政令指定都市・23区		-0.178	0.837
高齢化率		-2.335	0.097
Nagelkerke			0.031
-2 対数尤度			2323.347
χ^2			25.666 **
N			864

(注1)生活満足度=5は非常に満足している。
(注2)「地縁的な活動及びボランティア等の両方の活動」と「地縁的な活動のみ」の参照グループは「ボランティア等のみ」。次表で同じ。

(2) 居住希望と社会的活動

回答者全員に対し、今後も現在お住まいの地域に住み続けたいかと質問したところ、「住み続けたい」(66.8%)、「どちらでもいい」(25.1%)、「地域外に引っ越したい」(8.1%)との結果となった。

回答が分かれた要因を探るため、「住み続けたい」を参照グループ、表-10と同じ説明変数で、多項ロジスティック回帰分析を行った(表-11)。

分析の結果、地縁的な活動とボランティア等の両方に参加している人ほど、また、地縁的な活動のみに参加している人ほど、ボランティア等のみに参加している人よりも「引っ越したい」や「どちらでもいい」より「住み続けたい」を選ぶ傾向が認められた。地縁的な活動への参加が生活の満足度や住み心地の良さにつながる一方、参加して

いない人に居づらさをもたらしている状況があると考えられる。高齢であるほど、「引っ越したい」や「どちらでもいい」より「住み続けたい」とする傾向も確認できた。友人や知人に誘われたことが活動参加のきっかけである人ほど、女性であるほど、高齢化率が低い地域に居住している人ほど、「引越したい」より「住み続けたい」とする傾向も認められた。また、地域課題解決に貢献したいので活動に参加した人ほど、「どちらでもいい」より「住み続けたい」とする傾向も認められた。

表-11 今後も現在の居住地域に住み続けたいか
(多項ロジスティック回帰分析:参照グループは「住み続けたい」)

	地域外に引っ越したい		どちらでもいい	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
定数	-2.986	0.051 **	-0.176	0.839
男性	0.455	1.577 *	0.265	1.291
年齢	-0.024	0.977 **	-0.022	0.978 **
地縁的な活動及びボランティア等の両方の活動	-1.038	0.354 **	-0.685	0.504 **
地縁的な活動のみ	-1.277	0.279 **	-0.650	0.522 **
スポーツ・趣味等	0.215	1.240	0.042	1.043
活動に参加したきっかけ	-0.103	0.902	-0.427	0.653 *
地域課題解決に貢献 友人・知人に誘われて	-0.912	0.402 *	-0.156	0.856
政令指定都市・23区	0.003	1.003	-0.291	0.747
高齢化率	7.871	2619.850 **	1.869	6.483
Nagelkerke	0.101			
-2 対数尤度	1343.920			
χ^2	73.463**			
N	864			

7. まとめ・考察と今後の課題

(1) コロナ危機における社会的活動

本稿では、社会的活動への参加者を対象としたアンケート調査の結果に基づき、社会的活動に対するコロナ禍の影響をみた。影響を大きく受け、ほとんど活動が行われなくなった割合は、地縁的な活動は約6割、ボランティア等では約半数、何とか活動を継続した割合は、地縁的な活動は約3分の1、ボランティア等は約4割であった。

活動を継続するために講じられた措置としては、オンライン活用は比較的少なく、飲食や懇親会の取りやめ、イベントの規模縮小、活動回数の削減、感染防止対策が多かった。各活動の特性に応じた様々な措置を複数講じて、活動継続に至っているケースが少なくないことが分かった。

地縁的な活動では、女性であるほど、高齢であるほど、活動が継続された傾向がみられた一方、ボランティア等では活動数が少ない人ほど、活動が継続された傾向が認められた。多くの地縁的な活動では、女性や高齢男性が活動の中心になっていると推測できること⁷から、活動の中心的担い手として女性や高齢者が、何とか活動を継続しようとコロナ禍の影響を受けた初期段階において懸命に努力したことがうかがわれる。ボランティア等では、他の活動に携わっておらず、当該活動に注力しやすい人が中心となって活動が継続されたと考えられる。

地縁的な活動がほとんど行われなくなった際、若い人ほど、また、地域課題解決に貢献したかったので活動に参加した人ほど、生活の満足度を下げた傾向が認められた一方で、生活の満足度を上げた人が7.4%みられた。地縁的な活動参加者の一部にとって、活動が負担感の大きなものになっている可能性がある。

ほとんど行われなくなった活動のうち再開する見込みが立った割合は、地縁的な活動は約3分の2、ボランティア等は約7割、再開の予定が立っていない割合は、地縁的な活動は約3割、ボランティア等は約2割であった。再開の見込みが立っていない割合においても、対面性が重要な要素となっている地縁的な活動はより深刻な状況にあることがわかった。

地縁的な活動においてもボランティア等においても、若い人ほど活動再開の見込みがある傾向が認められた。コロナ禍という危機の性格上、若者の方がオンラインの活用に長けていることが関係している可能性がある。一部の地域において行われているような、市民活動を担っている高齢者等を対象にしたオンライン活用のための講座の開催等の支援が行政に求められる。

また、地縁的な活動においては、地域課題の解決に貢献したいという意欲を持って活動に参加した人ほど、活動が行われなくなったので生活の満足度が下がった人ほど、活動を再開する見込みで

⁷ 社会生活基本調査(2021)によると、ボランティア活動(地縁的な活動も含まれる)のうち、自治会、町内会等の「まちづくりのための活動」の割合が男女とも最多で、男性のボランティア

活動の割合は65歳以降の年代で高く、女性は年代による差は小さいことから推測できる。

ある傾向が認められた。都市部であるか、高齢化が進んだ地域であるかといった地域特性は活動再開の見込みに影響を与えていないことを考えると、地縁的な活動では、地域を問わず、活動に携わっている人の活動への思いや地域課題を解決したいという問題意識が活動再開の原動力となっていることが明らかになった。

(2) 生活の満足度と居住希望と社会的活動

豊かなソーシャル・キャピタルを有していると考えられる、地縁的な活動とボランティア等の両方の活動に参加している人ほど、生活の満足度が高かった。地縁的な活動に参加している人ほど、その地域に「住み続けたい」とする傾向が強かった一方で、橋渡し型のソーシャル・キャピタルに分類されるボランティア等のみに参加している人ほど、「地域外に引っ越したい」、或いは「どちらでもいい」とする傾向がみられた。地縁的な活動への参加が生活の満足度や住み心地の良さにつながる一方、参加していない人に居づらさをもたらしている状況もあると考えられる。結合型のソーシャル・キャピタルである地縁的な活動は、内部

指向的で排他的な性格を帯びる傾向があること⁸が関係していると考えられる。こうした地縁的な活動の閉鎖性が、前述した一部の参加者が感じている重い負担感につながっている可能性がある。地縁的な活動を改善していく方向性として、閉鎖性を打破し、開かれた活動を行っていくことを検討する必要がある⁹。活動の在り方や活動内容の不断の見直しは、社会的活動に熱い思いを抱く人を、世代を超えて絶やさないことにつながり、ひいては社会的活動が危機に直面した際の活動の継続力や回復力の源にもなると思料する。

(3) 今後の課題

先行研究で一部触れたようなコロナ禍の下で社会的活動が継続された具体的な事例をさらに収集・分析し、広く共有することは今後の重要な課題と考える。また、母数が少ないこともあって十分行うことができなかった、回答者の仕事・学業の状況と社会的活動の関係についての分析も、社会的活動の持続可能性を考察する上で欠かせない課題といえよう。

参考文献

- 1) 稲葉陽二 (2021) 「ソーシャル・キャピタルの二面性を意識しつつ社会という箱の中で自分の居場所を見極める」『ソーシャル・キャピタルからみた人間関係—社会関係資本の光と影』日本評論社、pp.23-41
- 2) 学術講演会報告 (2021) 「新型コロナによる社会的な分断をどう捉えるか? 孤立対策と新しい社会に向けたコミュニティ形成についての意見交換」『都市住宅学』113号、pp.153-164
- 3) 総務省地域力創造グループ地域振興室 (2021) 「令和2年度地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書」
- 4) 大正大学地域構想研究所 (2022) 「コロナ禍の下における社会的活動の状況についてのアンケート調査—参加していた地縁的な活動の再開予定が立っていない人約2割、ボランティア等は約1割」
https://chikouken.org/report/report_cat03/13672/(参照 2023/02/10)
- 5) 地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会 (2016) 「ソーシャル・キャピタルの豊かさを生かした地域活性化」
- 6) 内閣府国民生活局 (2003) 「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」
- 7) 内閣府経済社会総合研究所 (2005) 「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」
- 8) 中田実・山崎丈夫・小木曾洋司 (2009) 『地域再生と町内会・自治会』自治体研究社

⁸ 稲葉(2021)は、全てのクラブ財としてのソーシャル・キャピタルが潜在的にその組織に加わっていない者に対し負の外部性を持つと説明する。

⁹ 内閣府国民生活局(2003)では、「ソーシャル・キャピタルが潜在的な可能性として有する負の側面」として、強力な結合型

ソーシャル・キャピタルに内在する排他性の危険性等を指摘し、「こうしたリスクを低下させるため、ソーシャル・キャピタルは、特定グループの利益のためのものとするのではなく、社会の全ての人がアクセスできるようにオープンなものとすることが重要である」と述べている。

- 9) 新田貴之 (2022) 「コロナ禍におけるホームレス支援 NPO 活動の脆弱性と課題—仙台夜まわりグループの事例を通して—」『The Nonprofit Review』 Vol.21、 Nos.1&2、 pp.135-143
- 10) 日本総合研究所 (2008) 「日本のソーシャル・キャピタルと政策—2007 年全国アンケート調査結果報告書」
- 11) 畠山明子・大島康雄 (2021) 「With コロナ時代の地域見守り活動と包括的支援体制構築の課題」『星槎道都大学研究紀要』 2 号、 pp.105-113
- 12) Putnam, R.D. (1993) *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press. (河田潤一訳 (2001) 『哲学する民主主義』 NTT 出版)
- 13) 松島みどり・伊角彩 (2019) 「幸福度—経済要因だけでは規定されないもの」『ソーシャル・キャピタルと市民社会・政治』 ミネルヴァ書房、 pp.255-285
- 14) 吉田守実 (2021) 「コロナ禍における地域福祉活動の現状—北東北3県の市町村社会福祉協議会へのアンケート調査からの報告—」『八戸学院大学紀要』 62号、 pp.119-144